

# サイトー企画「鶴亀メール」インタビュー記録

2002年10月1日実施

インタビュー対象者： 齊藤 秀夫 氏

インタビュー担当者： 藤田 英樹・生稲 史彦

## ➤ ソフトウェア開発の詳細

### ソフトウェア開発の最初の「とっかかり」

- ・ 純粋な興味やおもしろさから、自分でやってみる、使ってみる(コンピュータ関連書籍の付録のプログラミング・リストなどをそのまま入力してみる)
- ・ 楽しそうだから、自分で作ってみたいと思う
- ・ 実際にプログラミングをしてみると「自分ならこういうことができるんじゃないか」と気づく
- ・ こうした活動を行う理由はすべて自己満足(ギターを弾いたりするのと同じ)
- ・ これらは1980年代当初のこと(雑誌：ベーシック・マガジンなど、ハード：PC-6001)

### オンライン・ソフトウェアの開発に着手するまでの経緯

- ・ 中学卒業後、5年間高等専門学校に通い、その後、1988年に富士通に入社
- ・ ソフトウェア開発の会社だと思って入社したが、実際にはプログラミングをさせてくれる機会が少ない(後述)
- ・ 齊藤氏はプログラミング、ソフトウェア開発の仕事をしたくて入社した
- ・ そこで「独自に(=業務外で、隠れて)」ソフトウェアを開発
- ・ 当初はMS-DOS用ソフトウェア、1990年代にはOS/2用ソフトウェアを作成
- ・ ソフトウェアの種類は、通信ソフトから始め、のちにエディタを開発
- ・ 社内で同僚に配布したところ、OS/2向けのソフトウェアなどは少なかったため、珍しがられ、喜ばれた
- ・ ただし、業務とは無関係のソフトウェアを作っていたので、それらのソフトウェアは仕事に使用されたわけではない(パソコン通信などで遊ぶためなど)
- ・ 同僚からの評判はよかったので、シェアウェア公開でいけるんじゃないかという感触を得る

### ソフトウェア公開までの経緯

- ・ 1990年、Windows3.0とDOS/Vが発売される
- ・ コンピュータ(PC)のグラフィック性能が向上する(高解像度・多色表示の実現)
- ・ これを「ビジネスチャンス」と見て、それまでに開発していたソフトウェア(通信ソフト、エディタ)の移植を始める(MS-DOSやOS/2ネイティブのソフトウェアをWindows版へ)
- ・ Nifty-Serveがシェアウェアの代金徴収代行サービスを提供していたこともあり、シェアウェアのビジネスが既に成立していた
- ・ そこで、自らも会社を立ち上げ、Windows版のソフトウェアをシェアウェアとして公開

- ・ 1992年「秀Term」(通信ソフト)公開
- ・ 1993年頃「秀丸エディタ」公開
- ・ これらのソフトウェアのバージョン・アップを重ねて現在に至る

更新履歴は制作者の書きようによって違いが出てくるので、研究資料として使用するには注意が必要だろう

#### 鶴亀メールの開発経緯

- ・ プロバイダの Xaxon からメール・ソフト(“NetMail”)を開発したいので、テキスト編集機能を担当するモジュールとして「秀丸エディタ」のコンポーネントを提供して欲しい旨、申し入れがある(この当時、Internet Explorer は Ver2.0、Outlook は存在しない状況)
- ・ 斉藤氏は了承し、実際に開発・販売される
- ・ Internet Explorer のバージョンがあがり、Outlook も出現したこともあって“NetMail”の先行きが思わしくなくなる(結果的に 2000 年 6 月には販売停止)
- ・ Internet Explorer に Outlook がバンドルされているので、あたかも Outlook が Windows 標準のメーラであるかのようにユーザには認識されるようになっていた
- ・ ここで斉藤氏は、メール・ソフトはビジネスとして成り立たないかもしれないとの危惧を抱く
- ・ 2000 年初め、Xaxon の動向、“NetMail”の動向を見ていたユーザ・グループが、Xaxon の態度変化に気づく(「どうも“NetMail”がおかしい」)
- ・ モジュールを提供していたサイトー企画に、NetMail ユーザが要望を提示(「サイトー企画さんで何とかならないか」「秀丸エディタ・ベースのメール・ソフトを、動作すれば良いから提供して欲しい」など)
- ・ 2000 年 4 月からメール・ソフトを開発開始(一からコードを書き下ろす)
- ・ 2000 年 8 月に公開

#### ➤ その他、開発に関する事項

##### バージョン・アップ、サポートについて

- ・ 秀ネットのフォーラム内にあるサポート会議室などに寄せられるバグ報告、ユーザからの要望に答えるためにバージョン・アップを行う
- ・ 頼まれると断れないし、制作者自らがソフトウェアに対して責任を負うべきだと考えているから
- ・ 秀ネットのフォーラム内のサポート会議室が主なユーザとの接点
- ・ 基本的に「サポート会議室に寄せられるユーザからの質問にはきちんと答えるべき」だと考えている
- ・ 「質問者をいじめる(「ボコボコにする」)ようなサポートではダメ」
- ・ 例えば、とんでもない要望を提出した初心者ユーザなどが、ヘビー・ユーザたちにバッシング

されるような状況になるようではいけない

- ・ そうした場合にも、何も発言せずに「容認」の態度をとるのではなく、ヘビー・ユーザたちと同意見なら作者本人が自分もそう思うと発言すべきである
- ・ 一般的な企業のサポートに質問して、企業から文句を言われたり、質問に答えてもらえなかったりすることはないだろう。従って、オンライン・ソフトウェアのサポートであっても同様に行うべきだろう
- ・ メールで寄せられる質問・要望は、主にライセンス関係中心だが、中にはソフトウェア本体に関する質問・要望などもある
- ・ 対応としてはメールで質問に答えたり、質問に該当するサポート会議室を紹介したりする
- ・ 電話による問い合わせ(レジスト・キーの入力など)もあるが、その場合にも丁寧に応えるようにしている
  
- ・ 「秀シリーズ」は他(社)のソフトウェアに比べ、サポートに投げられる要望が圧倒的に多いと思う(他のソフトウェアの ML や BBS では要望が少ないと感じている)
- ・ その理由は、頼まれたら断れないという人のよさのせいか、言われるままに機能拡張してきた結果だろうかと考えている
  
- ・ 有名なソフトウェアは一通り見て、ソフトウェア開発に活かしている
- ・ 有名なソフトウェアを参考にしてソフトウェア開発を継続(含バージョン・アップ)するのは、「自分から(斉藤氏の発案による)」というより、ユーザなどに促されて行っているという傾向が強い
- ・ 上記のようにユーザからの要望を受け入れ、有名なソフトウェアを一通り参考にしているので、結果として「鶴亀メール」が非常に多機能(=「オプションが多い/多すぎる」)ソフトウェアになっている

#### 開発環境

- ・ 開発言語は Visual C
- ・ Web サーバも保有
- ・ 機材はテスト用も含めると 10 台
- ・ 内訳はサーバ 1 台、各人の作業用に 1 台ずつ、他の機材はテスト用(アルファ系のプロセッサを搭載した旧型機や NT 3.51 システムもあり)

#### ➤ 開発経過の詳細

#### バージョン・アップの状況

- ・ ユーザからの機能追加の要望が始まり
- ・ 自分で作りたいものと言うより、要望があったものを作っているというのが実態(「秀 Term」「秀丸エディタ」の初期バージョンくらいまでは自分が作りたくて作っていた)
- ・ 要望された機能(「鶴亀メール」にはなくて他のメーラには実装されている機能など)については、

周辺ソフトウェアを参照している

- ・ マクロ(ソフトウェアが標準で備えていない機能や、特定の操作の自動化を実現するための関数機能のようなもの)によって対応可能な場合は、マクロを使って下さいと回答するか、マクロに関数を追加することで対応
- ・ マクロで対応できない機能に関しては、バージョン・アップで対応することもある
- ・ ただし、バージョン・アップで対応すると新たなバグが発生するときもあるので、出来ればしたくはない(「ほら、要望に応えたらバグが出ちゃったじゃないか。どうしてくれるんだ」という気持ち)
- ・ 場合によっては「鶴亀メールでは無理です」と回答することもある

#### ➤ 開発対象についての詳細

- ・ 基本的に、開発者向けキット(SDK など)やインターフェースの公開はしていない
- ・ ただし、マクロの関数の中には「秀丸エディタ」「鶴亀メール」本体の機能呼び出すものもある
- ・ 従って、そうしたマクロを介して、ユーザ独自のライブラリ(C言語で書かれたプログラム、プラグインに相当)を機能させることは可能
- ・ 明示的にプラグイン機能を実装しているわけではないが、実質的にはプラグイン機能を実現可能である
- ・ 「鶴亀メール」起動時に.dll ファイルそのものをロードすることはできないが、マクロを起動時に実行できるので、そのマクロから.dll ファイルを呼び出すことができるからである
- ・ その際、メニュー構造を変更することはできないが、メニュー・リストの中のマクロ一覧にはマクロが登録されるので、プラグイン機能と同等であると言える

#### ➤ その他、開発に関する事項

- ・ ユーザやマクロ開発者とのオフラインでの交流はない

#### ➤ 開発組織

開発チームの規模の変化

- ・ 現在は、  
    斉藤氏(35歳)が「鶴亀メール」をメインに担当しつつ、「秀ネット」管理の一部、他の小規模なソフトウェア開発を行っている  
    山本氏(28歳くらい)は「秀丸エディタ」の開発を担当している  
    KON氏(36歳くらい)は「秀ネット」を担当している
- ・ 1992年ころからの数年間、「秀Term」や「秀丸エディタ」のみを開発していた時期は、斉藤氏

1人で開発を行っていた

- ・ 1995年、32bitベースのWindows95が登場し(それまでは16bitベースのWindows3.1)、そのためのソフトウェアの移植作業などで非常に忙しくなった
- ・ 「秀丸エディタ」担当者として山本氏が入社(他のソフトウェアの移植は斉藤氏が行う)
- ・ 1998年か1999年ころ、メールの返信などの雑務に忙殺されるようになったので、求人広告をホームページに出したところ、それをめざとく見つけたKON氏が応募してきた
- ・ KON氏は、開発言語はVisual Basicだけしか使えないと言うので、Visual Basicを利用してできる仕事を割り当てることにする
- ・ メール返信などの雑務以外に、「秀Term」のアドイン開発や、サーバの立ち上げ、「秀ネット」の管理運営、HPの管理などがKON氏担当業務となる

#### ➤ 配布者の形態について

- ・ 有限会社になっていることに深い意味はない
- ・ 強いていえば、個人経営に比べ、税金などの申告、保険や年金、ライセンス締結などの取引関係などで有利なため、有限会社になっている
- ・ 例えば、ソフトウェアの販売先が企業や学校の場合、個人では取引できないが、会社形態をとっていれば取引ができる

#### ➤ ソフトウェア開発の詳細

ソフトウェア開発の「やる気」の源

- ・ バージョン・アップのみなので、やる気があるとは言えないのではないか(「シェアウェアをやっている人は基本的にやる気はないと思う」)
- ・ 開発を終了しないのは、収入があるから(「収入があるから続けている」)
- ・ 雑誌掲載などは、昔は「有名になってしまうのではないか」「変に名前が売れても困るなあ」と思いイヤだったが、現在は、それほど有名にならないことが分かったので、応じるようにしている
- ・ 加えて、断るのにも「エネルギーがいる」ので応じている(「何でも聞いてくれ」という心境)
- ・ 「ファンサイトを作ってくれているユーザやマクロ制作者などの期待に応えなければ」という思いがモチベーションの源泉になっている可能性はある
- ・ 自分が意図した機能が実現されたときは「うまくできた」という達成感がある
- ・ また、ユーザへの対応を(他のソフトウェア作者に比べ)きちんとやっているという自負はある
- ・ 基本的に「やる気はない」ので、シェアウェアで通常行う、ソフトウェアのマーケティングなどは全く行っていない
- ・ マーケティング・リサーチ、戦略立案、ビジョン作成の必要性は感じている
- ・ 一般に独自のソフトウェアを開発しようとするのは、ソフトウェアを開発できる能力・環境が

ありながら、その能力を発揮できない、開発させてもらえない場合ではないだろうか

- ・ そういう人たちの中から、フリーウェアやシェアウェアで自分の能力を発揮し、好きなこと / やりたかったことをやろうとする人たちが出てくるのではないか
  - ・ そうしてある程度売れたり、人気が出たりしてうまく行けば、そのままソフトウェア開発を継続するのだろうが、失敗してしまうとコンピュータ・ウィルスを作ってみたり、ハッカーになってみたりしてしまうんじゃないだろうか
  - ・ そのような行動に走る原因としては「悪目立ちでもいいから目立ちたい」というような心理が働いているのではないかと思う
- 
- ・ 斉藤氏入社当時の富士通はバブルのまっただ中にあり、斉藤氏が配属された部署の仕事は、仕様書の作成、外注先から納入されるソフトウェアのテスト、企画立案のみであった
  - ・ プログラミングやソフトウェア開発は外注していた
  - ・ 自分でプログラミングしたいという欲求が強まる(「自分はプログラミングがしくてこの会社に入ったのに...」)
  - ・ 会社の仕事は最低限(= 残業はほとんどせず)にとどめ、「裏方業」「仕事以外の作業」が許される環境を活かして独自のソフト開発を行う
  - ・ このため特別に不満があったというわけではない(シェアウェアを作っている文句も言われず、叱られることもなかった)
  - ・ しかし、(やりたいことができることで)満足も得られて、かつ自由に仕事ができ生計も立つことがわかったので、(独立して)シェアウェア登録に踏み切った
- 
- ・ 当時の富士通にはソフトウェア部門をマネジメントする人材がいなかった
  - ・ とりあえず大量に人材を採用して、ソフトウェア開発ができる人 / できない人を識別せずに適当にバラまいたため、部門全体のレベルが上がらず、ソフトウェア部門が弱くなってしまった
  - ・ ソフトウェア部門の開発能力が平均的に下がってしまうため、社内ではソフトウェア開発ができるはずもなく、外注せざるを得ない
  - ・ そうすると、実際には優秀な人材も多いので、それらの人たちは自分に相応しい仕事を与えられないので退出してしまう

#### 開発経過の詳細

- ・ テスト、デバッグはサイトー企画では行わない
- ・ 開発したものは即時公開し、サポートでバグ報告や機能追加の要望を受け付け、バージョン・アップ時に反映させる
- ・ 常にオープン・ベータ・テストを行っている状態だと言ってもよい

➤ ソフトウェアとその開発の概要

今後の開発予定

- ・ 斉藤氏はやる気はなし
- ・ 具体的な企画があるわけでもない
- ・ サイトー企画の収入は「秀丸エディタ」によるものが大半なので、社員には「自分の食い扶持は自分で稼げ」とも言っている(笑)
- ・ サイトー企画は「秀丸」ブランドでもっている会社
- ・ 「鶴亀メール」は「秀丸エディタ」の「おまけ(オプション)」という位置づけ
- ・ 「鶴亀メール」を含めたメール・ソフトが成功したのは、セキュリティの問題やユーザ・インターフェースの部分で Outlook が敬遠され、他のメール・ソフトへの需要が発生したからであろう
- ・ ただし、PC 関連書籍などでの宣伝効果は大きい(メーラ紹介の記事など)
- ・ ブラウザ市場を見れば分かるが、マイクロソフト(Internet Explorer)がそれなりの製品を出している、有料でかつ OS とバンドルされていないソフトウェアをわざわざ入手しようというユーザはほとんどいないだろう
- ・ 現在、Opera がある程度成功してるのは無料だからだろう
  
- ・ ソフトウェア開発に関し、斉藤氏が「熱かった(やる気があった)」時期 = 学生時代と「秀 Term」のころ、「秀丸エディタ」の開発初期のころのみ
- ・ それ以降は惰性でやっていると言ってもいいかもしれない